

雑詠日記

徐山猿声

卷の七

一九九四年

市井一人

武田泰淳は、「日常感覚は、それだけでは紙面に定着する重量はない」と言っているが、わたしの雑詠記録は続いている。多江健三郎が小説家として、「人生を生きなおすことはできない。しかし小説家は書きなおすことができ、それは生きなおすことはいえぬにしてみても、あいまいに生きた生にかたちをあたえることなのだ」と言い、小説家でない者を「言葉は、それぞれの人が発見するもの」と励ます。

「語り」を「世界・内・存在の情態的な物解りを、意義に応じ分岐すること」と解き明かした哲学者は、「実存を開示する働きが、詩的な語りの独自の目標となる」と言明した。「言うべきことを十分に持たぬ現存在」、「自身の本来的で豊かな開示性を思うままにし得ない」わたしは、「黙ること」ができないのである。

人間の現象を解釈して汲み出されるものは、世界の科学的な記述が尽くせないほどに、果てしがなくまたもつと切実でもある。「詠じて帰る」愉しみに意味を見出そうとした人につき従おうと思う。

「人間は誰でも自分のなかに人の人たる条件の完全な形をそなえている」ことを悟って、モンテーニュは三十八歳で思索の日々を選択した。東の陶淵明が田園に沈潜したのは四十二歳であった。その生活とそこで獲得されたものを、わたしは憧憬をもって見つめる。――「われわれの務めは、自分の品性を作ることで、書物を作ることではない。戦争と諸地方をかちとることではなく、生き方に秩序と平静さをかちとることである。われわれの偉大で光輝ある傑作は、立派に生きることである。」

一月一日  
めでたきは正月に咲く山つつじ

一月四日  
人間じんかんに生きて迎える年初め自由を求め腹くくる時

一月七日  
鴨下りる寒の夕闇都市の川

名文の条件：イメージの喚起力か意味の伝達力（吉本隆明）。

「悪文とは表象不可能なものに面接したときに文章が採るべき最も誠実な態度のことだ」（井口時男）。

名文、悪文、いずれがよろしいか。

一月九日  
一心の太鼓の音は寒篋もり  
（山裾の寺の境内で聞く）

一月十日  
長々と鳴き交わす猫寒日和

一月十五日  
冬空に塔の相輪ゆるぎなし  
（母を近くの寺の報恩講へ連れてゆく）

寒日和法座聴き終え笑む老女

熱爛で月の盃満たすべし

一月二十一日 天下る無数無量の雪の精

わが山に雪の精満ち森となる

一月二十三日 寒の陽が書棚に揺らす葉の影絵

一月二十五日 天空に光が凍る冬の月

天空を億光年も渡る星

一月二十六日 月既に高く気高く寒の暮れ

(太陰暦十二月十五日)

「現実の経験の世界に生き生きと現前するものを、その時その場ただ一回

かぎりの個人的な事象として、あるがままのその純粹な原初性において、これらの詩人たち（代表：リルケ）は自己の内部空間に定着させ、その上でそのものの純粹な形象を、日常言語より一段高次の詩的言語にそのまま現前させようとする。」

「一瞬のひらめく存在開示。人がものに出会う異常な緊張の極点としてのこの出会いの瞬間、人ともとの間に一つの実存的磁場が現成し、その場の中心に人の「・・・の意識」は消え、ものの「本情」が自己を開示する。芭蕉はこの実存的出来事を「物に入りて、その微の顕れる」こととして描いている。」

「リルケと芭蕉のようにそれぞれ違った意味で「即物的直視」を事とする詩人とは別に、同じく存在の意識体験的な真相開明に執拗な情熱を抱きながら、しかも一切の「即物的直視」を排除して、マーヒーヤ（普遍的本質）をそのイデア的純粹性において直感しようとする詩人がマラルメである。」

…井筒俊彦著『意識と本質』。

眠りに入る前の夢へのいざないとして読んでいた『新古今集』を読みおわった。

一月二十八日

山並みを白くともなく雪覆い薄墨で描く天と地の美を

一月三十一日

降り積もる記憶を今は片付けて後の忘却置く場所作る

数日かけて書棚の整理。古い物は棄てざるを得ない。

二月四日

春立って今日は緋色に咲く椿

立春の雨に春見ぬ拙き身

二月八日

紅白で春を寿ぐもちと梅

陶詩を読んでいる。「家は逆旅の舎にすぎない」と。「去るべき客」の為すべきことは何か。「発憤して食を忘れ、楽しみて以って憂いを忘れ・・・」

…『論語』述而篇。

二月十四日

春陽射る怒れる者の愚かしさ

二月十五日

母子して老いを老い行き沁む寒さ

見果てても覚悟はつかず春に入る

二月十六日

大雪の便りをよそに沈丁花

二月十八日

夏柑に黄を塗り重ね二月の陽

キジバトがくぐもる声で「春よ春」

二月二十一日

やわらかく理想論を申し渡すお方よ

その通り、それが実現できれば理想的だ

・・・・・・・・お方よ

その通り、その一般論なら誰にでも言える

話し合えといんぎんに命ずるお方よ

聴く耳を持たぬ者が他者に話しあえと言えるのか

人間を知らぬお方よ

君が組織に命令を下すことができるのか

歴史的現実知らず理想論命じる者は理想を知らず

権力はなまじの者を愚者とする自他を畏れるヒューモアを持って

澄みわたれ十日余りの春の月

陶詩読み酔って余寒に身を持する

「知音いやしくも存せずんば、已んぬるかな何の悲しむ所ぞ」、「楽しむ所は窮通に非ず人事は固より以つて拙なるも、いささか長えに相従うを得ん」。

二月二十五日

如月や千鳥は頭上下する

三月一日

春風の道に葉むらの照る椿

芽ぶこうと櫂は風は風に枝伸ばす

水ぬるむ川は鷗の昼寝時

三月七日

春灯が照らす糠雨茅の門

三月九日

カール・セーガン、アン・ドルーヤン著『はるかな記憶』を読む。

この闇は地球の春の澄んだ空

三月十三日

散る梅や陶詩をそばに迷いあり

迷い捨て「いざ帰りなん」春の野辺

「われわれは再び手段よりも目的を重んじ、役立つものよりも良きものを選ぶようになるだろう」：ケインズ。

三月十四日

顔上げよ山は若草萌える時

三月十八日

風塵は昔の春を訪ね行く

五つ六つ開く桜のあなたは七日の月がその身を揺らす

三月二十日

陳凱歌監督の映画『霸王別姫』を見に行く。人生の舞台は、社会の歴史と個人の歴史を必然的な条件として、次に可能な行為を選択することによって演じられる。

盛り場の舗道に一つ濃い椿

三月二十五日

気がつけば楽しんでる春の雲

三月二十六日

わが山に春の雪置く天意あり

木蓮の花弁の内に雪が入る

BS放送で『月の輝く夜に』という映画を見た。人間の喜劇。

人は不思議春の輝く月の下

それを、『はるかな記憶』は動物の行動との関連に探ろうとする。人間の自由の条件と可能性にいくらか見極めをつけること。

生命がこのわたくしに進化したその不可思議にわが手を見入る

三月二十七日

トラクターを守護する神人じにん鷲の列

夫婦して摘んだ土筆の夕の膳

三月三十一日

この春に付け足すほどの言葉なし

四月二日

山桜散つて紋白踊り出る

水車流れる川に霞織る

風と陽が柳に緑ちりばめる

炭焼きのけむり薫習春の山

四月六日

狂おしく湧くもの静め花に雨

江国滋氏が、ある人の厳しい俳句批評のことを『図書』に書いている。それによれば、語の習慣や論理や俳句の形式などに厳格に従えば、わたしには時たま単語を発することしか許されそうにない。芭蕉の句にもその批判を免れないものがあるというのだ。しかし、人間の発する言葉はいつも、批判に耐える何かをわずかにでも持つのではないだろうか。その言葉が心から出たものならば。

陶氏の心から出る言葉にも、同じ基調からくり返し出るものがある。

「悲しいかな 形を寓すること百年、 而も瞬息にして已に尽く。かの意気を導達するは、それ惟だ文か。・・・」。

四月十一日

困憊の意識に春の嵐聞く

四月十二日

喉しぼり花に嵐と鶏の声

舞い落ちる無数の花に朝の鐘

ワープロに同窓生の名を入れて古い望みが身に甦える

自足するいのち湧き出せこの身にもものみな萌える世界の春に

四月十五日

今年も山のホテルに来ている。研修しているのはわたし？。

緑青のみどり林に調和して洋館山に静かに根づく

目を閉じて聞けば思念は去来する法話に和して鳥のさえざり

山荘の縁で見上げる杉木立静寂に聞く風のささやき

谷底へ一期の旅の花、桜

四月二十二日

新緑の世界が胸で律動す

四月二十四日

町内会春爛漫の陽の中で

ねぎぼうず弾け海まで霞みけり

閑情の賦を読む軒におぼろ月

四月二十九日

小人と犬の留守番春の夜

帰去来分の辞に和し蠅の歌う夜

四月三十日

帰ってきた娘と親子三人で映画『時の翼にのって』を見に行く。「物語」が直面するのはいつも容易ではない「現実」である。その「現実」の展開して止まない連関が「物語」を生み出していく。

親不孝通りの地下で歴史的現在を問う映画に対す

地下を出て歓楽の街これはあの天使が降りた欲界の今

無色界に到達することは望むべくもないが、地に生まれた者も色界に跳躍できたなら……。

色界を時の翼にのって飛べ

小笠原賢二「和歌革新から百年後の難問」という一文（岩波『図書』）、  
「若い世代の、主体の希薄化・体験の脱落、遠近法の解体、他者の不在」を  
批判し、「斎藤茂吉に無規定な東洋的神秘主義や濃密な曖昧化があったこと」  
を指摘して、「近代以降の短歌がほとんどのパターンを消費し尽くして現在

に到達していることをまず確認すべきである」と。

五月三日

黒アゲハ光る青葉の色を吸う

五月四日

山一つ春爛熟し竹の秋

「詩人は花をもたらす人、哲学者はその精をもたらす人」

…シヨーペンハウエル。

五月六日

シヤクヤクは名手の弦に振り返る

(メンゼルスゾーン)

五月八日

水湛え初夏の花抱く白火鉢

五月九日

蓮華畑鋤かれ渴きを覚える日

五月十一日

卯月には頭を刈って衣更え

(太陰暦四月一日)

「言語と物との最初の対置は、どのような不確実性をも排除する仕方であり立つ。……この四つの値(数、形、比率、位置)を要素の《構造》と呼

ぶ」：フーコー『言葉と物』。

しかし、構造は力学的運動の一つの解である。

五月十二日

サラエボの写真は語る赤い血が今この時に地にしたたると

五月十八日

さくらんぼ一つ朝日に赤く照る

五月十九日

金鱗の鯉は風吸い氣息満つ

じゃがいもの花の紫風が漉く

五月二十日

蝶揺れて五月の風を開示する

鯨食えばふとふるさとの初夏戻る今母老いて黙して食べる

五月二十二日

光透く楓に千の瀧の糸

白糸の瀧に破顔の風落ちる

一望に神話の国を見はるかす磐座清め白糸の瀧

五月二十三日

猫の目は卯月の夜をおさめとる

五月二十五日

何ほどの事も無いよう世は移る活力萎えて事先送り

五月二十六日

走り梅雨晴れて蛙の宵の歌

高浜虚子の『俳句はかく解しかく味わう』の解説中の虚子の句にそれほど感動しない。句はしばしば詠んだ人の活動全体をまわりつかせて評価が成立する。短い一句が単独で作品として意味空間を広げることの困難さ。

五月二十九日

箴言を読んでグミ食う舌ざわり

五月三十一日

雀の子騒ぐ葵の花の鉾

花々にグミの木添えてわが妻は家と家人に華やぎ咲かず

この「済み」は良いわたくしか五月尽 (『存在と時間』を読み始める)

六月五日

梅漬ける妻と口きかぬ夕まぐれ

六月十日

六月の水は早苗の下に澄む

いかめしく黒い右翼の街宣車瑞穂の国の田植え見守る

土掘ればどこも古代の遺跡あり幾世代もの場所の共有

六月十一日

事成つて旨しわが家のグミのジャム

六月十四日

出で立てば蝶が導く梅雨晴れ間

六月十七日

百合の粉で指染め日記記す朝

六月二十日

梅雨寒や寿者たる星はもの言わず

「夕陽妄語」。「科学的知識が画期的に増大しても（死について）答えが得られたわけではない」、「物理学は、一般に科学は、すべての問いに答えがないし、おそらく答えることができない」、「詠じて帰る」べしと。

六月二十二日  
インドから伸びた雨雲水の星

六月二十四日  
若い式部の花 色づいて

百合の花弁は はらりと落ちて  
今日のわたしが始まります

逃げ水を追って昔の友に会う

水蓮の黄色まばゆい臯月晴れ

六月二十五日  
内閣は頓挫くるくる寿司を食う

七月五日  
忙しく暮らし心の渇く日々遠夏山の緑に見入る

行き行きてその下に入れ夏木立

七月十三日  
炎天は続く仕事は遅々として

七月十四日  
餅まきが終わり五色の吹き流し夏の夕陽にたわむれ遊ぶ

わが犬が腹波打たす暑さかな

七月十六日

緑陰の街道車のろく駆る

幔幕に龍王祭り雨を乞う

ふるさとの海高々と鳶上げる

水撒けば百合でトンボの夕涼み

鬼百合に休むトンボを一跳びで口にくわえて青蛙去る

七月十七日

後になり先になり行く蟻の道

刈る草に汗のしたたる墓掃除

緑濃く蟬音こもる竹の幹

七月二十日

熊蟬の朝の勤行声高に

七月二十二日

水無月に里芋の傘枯れて立つ

コウモリがぱたぱたと入る夏の月

七月二十五日

台風之余波に一鳴き夜の蝉

(期待の雨をもたらさなかった)

七月二十七日

麦茶入れたグラスに露の幾何模様

七月二十八日

湧く水を映像で見る渴く日々

七月三十日

田の青に癒し求める慈雨の後

犬と居て肩にヤモリの落ちる夜

七月三十一日

明け烏聞いてまた見る夏の夢

八月四日

自転車を降りてヒグラシ聞く家路

八月五日

光輪が幻となる遠花火

八月六日

広島で黙祷捧げる慰霊の日ちりめんじやこを朝食に食う

吊いの道しるべ立つ炎天下

市博物館へ「法隆寺展」を見に行く。

願いこめ諸仏諸天の百の顔

情態の千変万化舞楽面

「わたしたちはじっさい存在論的にいって原則的に、世界の第一義的な発見を「たんなる気分」に委ねないわけにはいかないのです」。「実存を開示する働きは、詩作的な語りの独自の目標となることができる」。

八月九日

転生し蟬名乗り出る新世界

炎熱に熔ける大気と蓮の花

八月十四日

虫の声を聞けば早は秋の入り

八月二十一日

新しい丘の公園下りつつ秋の気配を海風に聴く

文月の月雲とあり書を開け

八月二十三日

同窓から三十年の時超えた団欒を謝すはがき受け取る

月光が照らす暈は夢の原秋立つ風が音もなく行く

八月二十四日

一筋の道作りつつジェット機は光明求め夕日を目指す

いちじくを揚げて猛暑の甘味食う

八月二十五日

百日紅褪せて季節を委譲する

汗かいて愚者のしくみの世にあるよ

(無能とは無責任のこと)

八月二十八日

炎天下ものぐさ亭主がたまにする家の補修に玉の汗かく

九月七日

虫鳴けば転落の生に気付く夜

忙しく暮らし秋とも行き会わず

九月九日

トンボよ

一体どうしてこの車に乗りこんで来たのだ  
大学とも言えないような大学のしがない教師の車に  
もつと偉ぶった豪華な車もあるというのに。

トンボよ

一体どうしてバカげた話しを聞かされた男の  
あまり愉快でもない雰囲気のこの車に来たのだ  
世には運と一緒に軽やかな者もあるというのに。

トンボよ

そうか君は、このことを見届けに来たのか  
君と同類の者として、転落の生から飛び出し  
世界とわたしに、わたしがたしかに対決しているかどうかを。

トンボよ

君の輝く眼のように、わたしの眸は瞭らかだろうか

九月十二日

九月十三日

複眼で世界をしっかりと見据えているだろうか  
ぜひともそうありたいものだ。

トンボよ

君の透きとおる翅のように、わたしも翼を得たろうか  
日常の世界から翔んで、わたしの時間を掴んでいるだろうか  
ぜひともそうありたいものだ。

トンボよ

ぜひともそうあるように、わたしを賭けよう  
君がほかでもないわたしのもとへ来たのだから  
わたしの時間を生きながら、世界とわたしであるように！

よし、翔ぶのだ。

五斗米を蹴って花野にあるべきを

声持たぬ蟬が弓張る月の下

雲間から弓張る月よ鏑射よ

九月二十日

名月に雲が、肩凝る暗い夜

萩餅にすすきを欠いた心痩せ

九月二十一日

空の棺重ねて二つ秋彼岸

旅衣更えて出で立て澄む秋へ

口つぐむ虫としばしの物思い

人はその重い煩い脱ぎすてて身を新生に投げ入れるべし

九月二十三日

秋分の日が落ち今は暮れなずむ芝生の丘を時間と歩む

「ナニカであろう、そのときには」、「ナニカであった、かつては」、  
「ナニカである、今は」…ハイデッガー。

九月二十四日 野を飾る赤い水引万珠沙華

十月六日 二羽の鷺深まる秋の闇を衝く

十月八日 秋うらら光あまねき地にありて

行く道に赤肉団塊射る秋陽

十月十二日 吹き荒れた野分けが置いた虹の円

十月十三日 鬼蜘蛛は黄の戎衣着て門守る

十月十五日 何ほどをし終えて帰る秋の暮れ

十月十七日 十三夜雲も止めえず三人の月下美人のこぼれる笑みを

十月十九日 鯖雲に月の眼大魚泳ぐ空

十月二十日

秋雨にツワの葉深く底光り

竈馬身じろぎもせず秋の雨

十月二十三日

顔上げる日向の犬に秋の蠅

頂きに烏を吊るす庭の柿

椎の実が落ちて目を開く石の犬

おもむろに雉が去る畑黄菊咲く

十月二十五日

刈り田焼く火は黒々と土を食む

蠅抱え秋の夜長を祈る蜘蛛

十月二十六日

蜜蜂が耳元に来て秋の歌

十月二十七日

人間はいやなことがあれば、夜中に目が覚めることもある。

深くあれ身の内の湖そぞろ寒

十月三十日

銀杏が木の上で見る松飾り

(コマージュリズムの気の早いこと)

蓮の実が首伸べ実り秋更ける

花嫁のヴェールに蜜蜂友祝う

十一月一日

絶望せず蝶と連れ立つ秋の道

十一月二日

朝寒や陽はまぶた越し暖かき

十一月三日

茶会済み気取りの残る和服連

喧騒の中に文化をながめる日

秋日向千鳥つゞと歩み行く

十一面千手千眼観音に物見遊山の神妙な顔

観音の扶養する猫太る秋

黄葉し雷山充電しつある

十一月五日

訃報あり灯火に浮かぶ塵を見る

十一月六日

ひつじ田があたかも実る天高し

さきがけて櫛の紅葉を織る野山

十一月九日

人置いて桜紅葉は時熟する

十一月十日

秋空に螺旋を描き鳥たち勇士の群れはあくまで昇る

十一月十二日

晴れやかに葛の黄葉まとう真木

十一月十七日

行く秋の月が導く帰り道

(太陰曆十月十五日)

十一月十八日

雷が虚空揺るがす目覚めよ!

白菊に時雨あくまで非凡なる

十一月十九日

「熱情」を聞きつまどろむ晩秋の宵に情熱育みながら

十一月二十三日

キエシロフスキー監督の映画「トリコロール、青の愛」を見に行く。実に美しい映像だ。それも落ち着きのある色彩で、光と影の対比がていねいに画面に構成される。生死の境から帰還し、開かれた瞳がしだいに輪郭をはつきりと描き取りながら、意識が世界を認め自己を確認し始める。人間の感覚が砥ぎ澄まされて、世界の開示に誘う。観ている者も同じ心的状態に引き込まれる。ここでは音も重要な要素だ。存在をこのように身近に感じ取ること

が、中沢新一が唯物論に結びつけて語ろうとした「無底」の存在の底への降下と言えるかもしれない。人間はしかし、そのような降下をいつまでも続けることはできない。この世界で行為を展開することになる。映画では、物語はそれほど必然として展開しているわけではない。

生死の境にいる主人公を描く映像が人間の手の入った「景観」であることも、私の注意を引いた。日本人ならもつと人間から離れた深い山や森などの「自然」を場面として設定するかもしれない。

十一月二十六日

数々のつぶやきを聞くジェット機で日をさかのぼる旅寝の中で

十二月四日

跳ね橋がはねて旅人覚ます朝

(シカゴで)

数々の名画見た後並び立つビルをながめる湖の岸

十二月十日

旅の果て妙見山寺の鐘の朝

十二月十九日 急ぐ足止める鵜の実赤い艶

十二月二十日 わが顔を写す暗闇冬の窓

十二月二十二日 霜落とし月の白片消えかかる

十二月二十三日 忘却が踵を接す刻々をたらちねの母闘います

夜回りが去ってしじまに目は冴える

冬の夜を腕組みをして眠る犬

十二月二十九日 凧ぐ海や落葉の深い冬の坂

なつかしい冬よ障子の揺れる音

時超える営為はいかに築くべき

十二月三十一日 忘却も潰える母の大晦日

カオスをさえも紡ぎ出す「時」

潰え去るこの闘いはいつの日か

あの「誓願」の光の内に

つぶやきを・・・・・

一九九五年正月  
徐山亭 謹製

「波が浜辺に打ちよせるように」

W・シェイクスピア

波が浜辺のさざれ石めがけて打ちよせるように、  
人間の命も時々刻々その終わりにむかって急いでゆく。

一瞬一瞬がその前の一瞬と交替し、  
次々に前へ前へと争って進んでゆく。

人間は、生まれて光の世界にひとたび足を踏み入れると、  
忽ち這い始め、忽ち成人となるが、成人となるやいなや、  
邪悪な何かが忽ちその栄光に暗影を投げかける、  
賜物を恵んだ「時間」が今やその破壊者となるのだ。

「時間」は若者の輝く栄光を蹂躪し、  
美しい女性の額に幾筋もの深い皺を刻みつけてゆく。  
そうやって、自然の造り出した世にも希な光輝を食い荒らすが、  
その大鎌に刈りとられぬものは何一つとしてこの世にないのだ。  
それでも、この私の詩は、「時間」の暴虐な力をものともせず、  
未来永劫、君の見事な資質を讃え続けるはずだ。

